

モンテッソーリ教育学における“Aiuto alla vita” についての考察 その2 発達について

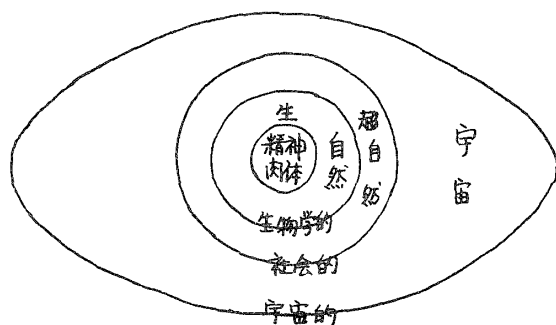
上野 慶子
(キリスト教ミード社会館)

・前回の補足

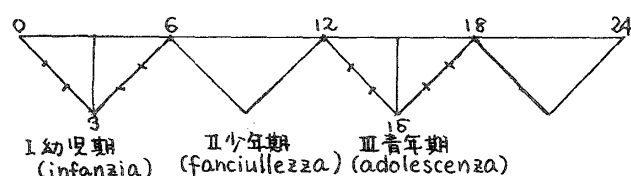
前回においては、モンテッソーリの言う「生」(la vita)の概念を定義し、また、成長(la crescita)と発達(lo sviluppo)の定義を試みた。しかしその後の研究で、モンテッソーリの「生」とは前回の定義の他に、三重の意味において理解されなければならないことが明らかになった^①。「生」の理解は、モンテッソーリ教育学の基礎となるため、発達論に入る前に簡単にここで示しておくことにする。その三重の意味とは、

1. 生物学的(biologico)
2. 社会的(sociale)
3. 宇宙的(cosmico) である。

第1の生物学的段階としての「生」は、自然の中で捉えられる「個」として理解されるものである。第2の社会的段階は、人間社会における超自然の環境(文明文化)内で、第3の宇宙的段階は、宇宙の中で捉えられる「個」として理解される。従って上述のものは、次のように考えられる。



・発達段階



(図はM.A. Paoliniによる)

上述の発達段階の中でも特に、モンテッソーリの思想が顕著に表われている幼児期に焦点をあてる。幼児期を、前半(0才～3才)と後半(3才～6才)に分けて考察を進める。

・発達の過程とは

前回みたように、人間の生とは肉体と精神の統一体であり、精神的生は、生まれてからできあがるものではなくa prioriなものであった。モンテッソーリは発達において、特に精神性を強調する。「人間の発達の最も重要な部分は、精神的生の中にあり運動の中にはない^②」それをうけ、イタリアのモンテッソーリ研究家であるピネターリは、発達を次のように定義づける。「人間の発達とは、animazioneとしてではなく、incarnazione(受肉化)として定義づけられる^③」これは、発達の過程を、肉体が先在し後に精神が宿るようになるものとして考えるのではなく、精神が先在し、それが肉体となってゆくことを示すものである。すなわち、精神が肉体を支配するようになる過程、また換言するならば、意志によって自らの運動を完全にコントロールできるようになる過程を発達というのである。以下ここで述べる肉体の概念は、主に「関係の生」を中心に示すものである。

・0才～3才の発達の特徴

モンテッソーリは、0才～3才の子供の状態を出生前の肉体的胎児と対応させ、精神的胎児(l'embrione spirituale)として特徴づける。前回ですでに述べたように、肉体的胎児が「構成の計画」に支配され、無に見えるかのような胚から肉体が形づくられていったように、精神的胎児もこの計画に支配され、無のように見える無意識の中から自分自身の精神性を築きあげてゆく^④。肉体としての新生児は誕生と同時にできあがっているが、精神はまだその肉体を支配することができない。モンテッソーリは、「精神的胎児」とは、世界に出るために肉体に閉じこめられている精神として考えられた新生児のことである^⑤と言っている。そのような新生児の精神的生は、まだ無意識の本能や衝動といったもので、意識的に完成したものは何も持っていない。しかし後に意識的完成に向って発達してゆくであろう潜在能力を持っており、モンテッソーリはそれを「星雲」(le nebule)と呼んでいる。その潜在能力である「星雲」は、Ormeによって環境での経験へと変換されていくが、それは無秩序に行なわれるの

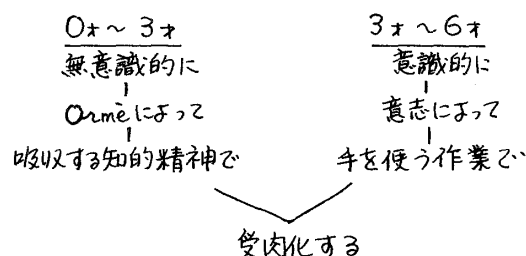
ではなく、本能的に求めようとする経験に秩序がみられる。それは「敏感期」(il periodo sensitivo)の作用によるもので、その時期に何が一番効果的な発達をもたらすかを無意識のうちに個体に示すのである。そしてこの年齢においては「敏感期」の作用によって本能的に選択された環境の印象を、主に「吸収する知的精神」(la mente assorbente)^⑥によって受肉化する。また、前述の「構成の計画」からみるならば、0歳～3歳の発達はそれぞれ独立しておりバラバラに発達しているという。誕生時に一応完成されている肉体的器官は神経中枢とまだ完全に結びついていないため、神経系は調和的に働かない。それがOmnéの刺激によって感覚器官や筋肉などの肉体的器官を動かすうちに徐々に神経中枢と結びつき精神の器官となる。そして全てが精神の器官として完成した時、「構成の計画」は終了し精神的胎児期を終えるのである。

・3歳～6歳の発達の特徴

モンテッソーリは3歳に一応の境界線を引き、完全な意識と記憶は3歳から始まるとしている^⑦。この時期には「吸収する知的精神」だけではもはや発達は不十分になり、意識的に「手」を使って環境をさぐり「作業」(il lavoro)することによって発達しなければならない。従ってこの時期の中心的な発達論は、「精神運動理論」(la psicomotricità)である。「精神運動理論」とは、一言で言うならば、感覚機能、認知機能、運動機能間の関係または統合についての理論である。それらは神経組織によって1つに結びついており、3つは調和的に統一して作用しなければならない。このことは反射弓を示される通りであるが、これらが調和して行なわれるものが真の「作業」といえるものとなる。そしてその作業が子供の発達段階または内的欲求にかなったものであれば、外面的には作業の「繰り返し」が見られ、内面的には「注意力の集中」がおこる。それは後には、前者は「運動の調整」へ、後者は「意志の発達」へと導かれ、それらは互いに密接な関係のもして発達してゆく。すなわち運動することによって意志が発達し、また意志が発達することによって運動が調整される。換言するならば、感覚器官と筋肉を動かす(特に手を動かす)ことによって、神経中枢(精神性)は発達し、意志によって自らの肉体のすみずみまで支配し思い通りに自分の運動をコントロールすることができるようになるのである。従って、「意志の外的表現はすべて運動の中にある」^⑧のであり、これが意志による「受肉化」である。

・全体的考察

以上の発達を全体の流れとしてみるならば、下図のように表わすことができるだろう。



発達の過程とは、絶えまない「受肉化」の過程であり、0歳～3歳においては、無意識的・本能的に、肉体的な衝動であるOmnéに刺激され、吸収する知的精神によって環境の印象も吸収し受肉化するものであった。それに対し3歳～6歳では、意識的な意志によって環境を手で探り、作業することによって環境の因果関係も受肉化するものであった。そして発達の過程にはさまざまな敏感期があり、その時期に適切な環境の刺激を受けることによって受肉化も達成してゆくことができる。言いかえるならば、受肉化とは、「敏感期」の支配の中で行なわれるのである。

紙面の都合上、今回は子供の「生」がどのような特徴のもとで発達してゆくかという考察に終わったが、次の機会では、前述の三巻の立場から詳しく述べたい。

〔注〕

- ①拙著、モンテッソーリ教育学における「生」の背景―個としての生から宇宙の中の生へ―、「神学と人文」(法政大学短期大学紀要)第25集 1985 ②M. Montessori, *La mente del bambino*, Garzanti, Milano, 1980 p74 ③M. Pignatari, *Maria Montessori e la sua riforma educativa*, Giunti Marzocco, Firenze, 1970 p80 ④M. Montessori, *Educazione per un mondo nuovo*, Garzanti, Milano 1970 p42-43, p58-59, p107, *La mente del bambino* p164 ⑤M. Montessori, *Il bambino in famiglia*, Garzanti, Milano, 1972 p25 ⑥menteという語は1711年語において精神領域の排せまい範囲をさし、知性、悟性、理解力、思考力、記憶力などと同義と考えられる。そのために la mente assorbente を「吸収する知的精神」と訳した。⑦ *Educazione per un mondo nuovo*, p107, *La mente del bambino*, p164 ⑧ M. Montessori, *L'autoeducazione nelle scuole elementari*, Garzanti, Milano 1973 p149